アダム・ファーガスン研究の新らたな観点

——H. H. Jogland の近著[1] によせて——

大　野　精　三　郎

1

私はここ数年，経済学史研究のうえでこれまでまったく無視されてきた18世紀中葉のいわゆる『スコットランド歴史学派』の歴史研究が古典派政治経済学の成立に果した役割と意義とを明らかにすることを研究題目としている。この学派に属し，しばしばこの学派の典型的代表者と目され，これまで比較的多数の研究文献をもつ Adam Ferguson について，最近，H. H. Iogland の研究がさらに新たらしくつけ加えられた。私は自分の研究題目を念頭におき，Jogland の研究を中心としながら，これまでの Ferguson 研究文献にたいしてこの新著がどのような意義をもち，この新著からなにを学ぶことができるかなどの問題について，若干の論点をこの覚書でまとめておきたいと思う。

Jogland の新著の大きな特徴のひとつは，『スコットランド学派』についての今世紀の40年代からはじまった新たらしい研究方法に立脚し，それに基ずく研究成果を広汎に吸収していることである。ここでいう新たらしい研究方法とは，一言でいえば，スコットランド学派に内在して，その思想体系を総体的に観察し評価しようとする方法である。これまで，Ferguson は，19世紀の後半に確立した社会科学のなかの部門科学の概念から，かれの著作の個々の叙述のみが全体的な関連からきりはなされて問題とされるにとどまった。たとえば，Ferguson の著作のなかに経済学，社会学，哲学，歴史学，倫理学という個別科学の先駆者をみいだしたり，同時代者と比較してそれぞれの分野での Ferguson の位置づけをおこなうという視角から，とりあつかわれた。とりわけ，社会学の先駆者としてかれの理論が多くの注目を集めたが[2]，経済学の分野では，A. Smith の『グラスゴウ大学講義』の発見によって，分業という思想の独創性が，Ferguson と Smith のいずれにあたえらるべきかが争われたりした[3]。このような傾向をたどった Ferguson 研究に終止符を打ったのは，アメリカの社会学者 Gladys Bryson の研究であったように思われる。かれは『この18世紀の旧い哲学は，大雑把に検討するだけでも，現代の社会科学の模範である[4]』という認識から，スコットランド学派の社会についての主要概念のいくつかについて Ferguson を中心に内面的連関を見失うことなく明らかにすることに成功した。

Jogland の新著もこの Bryson の方針を踏襲し，Ferguson に内在して，Ferguson の著作を全体的に，しかも統一的に理解しようと努めている。このばあい，Jogland の最大の関心は，Ferguson の社会学的・歴史学的・哲学的研究に一貫して共通する基礎を明らかにし，そこから逆に Ferguson の著作を体系的・統一的に理解しようとすることにある。この統一的視点は，Jogland によれば，Fergusonの人間についての科学である。Ferguson はこの人間についての科学を確立することによってスコットランド学派のなかで独自の地位を占める。すなわち，Jogland によれば『Ferguson の意義は，部門科学の内部での新らたな発言に負うところは殆んどなく，かれの時代の諸思想の総括の仕方にあるからでる』(S.164.) だが Ferguson はその時代の社会科学のそれぞれの分野の思想を百科全書的に総括したのではない。総括の仕方，すなわちその方法に Ferguson の重要な貢献があるのである。『かれの主要な功績は，疑いもなく方法の一貫性とそれを進歩への信念と結びつけていることである』。このことによって Ferguson の著作が社会学的内容からみてスコットランド学派のなかで『最終的な・しかも最も完

---

1) *Ursprünge und Grundlagen der Soziologie bei Adam Ferguson* (Beiträge zur Geschichte der Sozialwissenschaften. Heft 1). Berlin 1959.

2) ここでは例示的につぎの文献をあげるにとどめる。Huth, Hermann, *Soziale und individualistische Auffassung in 18 Jahrhundert, vornehmlich bei Adam Smith und Adam Ferguson.* 1909; Buddeberg, Theodor, "Ferguson als Soziologe", *Jahrbücher für Nationalökonomie*, Jena 1925, Bd. 123, III. Folge; Lehmann, William C.; *Adam Ferguson and the beginings of modern Sociology*, 1930; Benz, Trude; *Die Anthropologie in der Geschichtsschreibung des achtzehnten Jahrhunderts*, 1932.

3) Oncken, August, "Adam Smith und Adam Ferguson", *Zeitschrift für Sozialwissenschaft*, XII Jg. 1909.

4) Bryson, Gladys, *Man and Society*, 1945. p. 4.

成した形』(S. 63.) であり，歴史研究からみてこの学派の『典型的代表者』(S. 129.) とみられるのである。Jogland の新著はこのことを Ferguson の全著作にわたってではなく，『市民社会史』(1766)[5] を中心として明らかにすることを目的としている。

II

Jogland のいう人間についての科学とは，Ferguson の『市民社会史』の第1章「人間性の一般的特質について」をその主要内容としている。これについて Ferguson は，Montesquieu の『人間は社会に生まれ，そこに止まる』という命題を，自分の思想の指導原理とし，人間の一般的特質が，人間の社会的性格から生まれることに最大の力点をおいている。このことによってしばしば，かれは Montesquieu の注釈者にすぎないと批判されているが，しかし Montesquieu とことなり，人間の科学についての原理を確立させたものは Shafesbury 以来のイギリス経験論の方法であった。すなわち，17 世紀に支配的であった人間を純粋に理性的存在であるとみる絶対的合理主義に反対し，感覚を重要視し，合理主義によって排除された人間の感情を重視する人間把握の仕方である。Fegruson はこの伝統のなかで人間についての科学の原理を確立することができたのである。

Ferguson は人間を，『われわれ自身の観察しうる範囲内や歴史の記録のうちにあらわれるところを見渡すのである』。その結果，人間性の根本的事実として，次の3つが明らかとなる。第1に人間だけが全種族として進歩する可能性をもっている。人間をして動物から区別するものは幼年期から成年すなわち成熟期に進むことではない。動物はただこの個体的成長のみを知るだけにすぎないが，『人間は個体が進歩すると同時に人類全体としても進歩する。人類は前の時代に打ちたてられた基礎のうえにつぎつぎと新たらしい時代を打ち樹ててゆくのである。そして時代が進むにつれて，人類の能力の適用を完成の域に導かんとするものである。』(p. 7, 邦訳10ページ)第2の根本事実は，人間の示す才能と能力とは人間性の一般的特質に属するということである。人間はつねに目的物は改良しようとする性質をもっており，たえず自分自身と自己の能力を完成することを意図している。第3の根本的事実は，人間の社会的性質にある。『人間はつねに群れ，あるいは仲間をなして彷徨または定着し和合または闘争してきた』(p. 24. 邦訳 31 ページ)。『社会は個人と同様に古い』。この3つの事実に照応して人間生活について3つの原理が導きだされる。そのひとつは自己保存の原理である。それは2つにわかれ，そのひとつは動物的な自己保存及び種族保存の原理であり，他のひとつは社会性の原理である。人間の社会性は，人間に固有な能力，人間にとっては幼年期が比較的長く両親の愛情を必要とすること，人間の仲間への愛着，すなわち『愛情，社会への愛，また安全への願望』からなりたつのである。以上2つの原理は，同時代のスコットランド学派の人々が共有するものであるが，Ferguson は人間生活についての第3の原理として戦争と不和の原理をあげている。個人や社会の対立・競争は利害の対立より生ずるだけではなく，憎悪や説明しがたい嫌悪からも生ずる。このような闘争は人間社会にとって破壊的ではなく，人間性の最も好ましい性質を示すことになる。この戦争と不和の原理を，人間生活における進歩の要因として肯定的に評価することによって，Ferguson は，スコットランド学派のなかで特異な地位をしめることになる。すなわち Crumplovicz は社会の内部での敵対的傾向を明らかにしたことによってかれを社会学の父とよんでいる。しかし Ferguson の特徴はこれにつきない。まえにあげた2つの原理，自己保存と社会性の原理との対立・調和の問題を最も具体的な対象である個々人の人間性の分析のなかで社会性の原理を根源的とすることによって統一的に解決し，新たらしい分野を開いたのである。

個々人の能力は，Ferguson によれば，人間生活における3つの原理に対応して，知力，道徳的感情および幸福への能力の3つとなる。知力は主に自己および種属維持のために用いられる。知力の獲得は経験に依存する。しかし生活にたいする配慮のみが人間活動の主たる原動力とは考えられない。『人間が本能によって結ばれ親切や友情といった性情によって社会のなかで行動するということが事実であるならば……道徳的関心の基礎はまったくこれらの愛すべき性質の種々のあらわれのなかに打ちたてられるであろうし，またわれわれが自ら維持する権利の意識は人類愛と公平無私の感情の動きによってわれわれの同胞にまで拡大されたものといえよう』(p. 52—3. 邦訳 66—7 ページ)。このような道徳感情が人間性の最も基本的な特質なのである。『害を与えないように慎むことは自然的正義の大法則であり，幸福を弘めることは道徳の法則である。』人間の幸福は自然的欲望の充足より，むしろ自己を『わが愛する社会の一部にすぎざるものと考え，その社会の一般的幸福こそわれわれの最高目的として追求すべきであり，またわれわれの行為の大いなる基準なのである』(p. 79 邦訳 99 ページ)。

このように人間の社会性を根源的とみることによって

5) Adam Ferguson, *An essay on the history of civil society*, 1766. ここでの引用は 1789 年版による。大道安次郎訳『市民社会史』上下2巻 1948 年。

Fergusonは，はじめて，個人主義的観点を超えることができたのである。すなわち，個人はそれ自身として自己目的ではなくなり，『かれは全体の一部分にすぎないのである』。

かくてFergusonにおいは社会の優位が決定的となる。人間の生活はすぐれてその社会性に条件ずけられている。人間生活の主要な形態は集団である。これによって純粋に外見的な個々人の集積と，集団としての社会学的統一として理解される社会とが区別される。Fergusonによれば，集団は特殊な構造をもつ社会学的に独特な形成物なのである。

III

『スコットランド学派』の歴史的方法は，その人間についての経験論的把握から必然的に導かれる。人間を社会と過去にむすびつける感性が，理性より根本的であるならば，人間の歴史と伝統は新らたな意義をうけとることになる。ひとつの制度を理解するためには，その起源から現状に至るまでを研究しなければならない。かくて合理理論における分析的・機械的方法に代って，発生史的・歴史的方法がとられなければならない。

このような方法による『スコットランド学派』の歴史研究の究極の目標は，市民社会の発展のためにふさわしい政治形態はどのようなものであるかを明らかにすることであった。

Fergusonは，この学派のなかで特異の地位を占めている。すなわち方法の点では，それを一層徹底させ，推論によらずあくまで事実を基礎としなければならないことを強調し，史料の源泉批判の必要を説くなど，この学派の枠を起え，19世紀の実証主義の萌芽をふくんでいるとJoglandは評価している。また内容の点からいってスコットランド学派の歴史的研究の体系的叙述者としての地位をしめている。Fergusonの歴史叙述は『未開』から『市民社会』に至る人間の社会生活の形態の歴史であるが，そこでは，政治のほかに経済，法，文学，風俗および学問の分野がとりあつかわれ，今日の用語でいわれる社会史あるいは文化史として，体系化されている。このような体系化を可能ならしめたものは，Joglandによれば，人間の経験論的把握と進歩の思想を結びつけたところにある。進歩の思想をFergusonは一方では文明(civilization)への歴史的生成の観察によって，他方ではあらゆる生活過程の変化の原理によって基礎づけている。

ここではJoglandの新らたな視点，すなわちFergusonの人間についての科学の視点からみた歴史叙述の特徴を要約しておこう。Fergusonは第1に，人間の社会性を基礎とすることによって，国家と社会とを歴史的に区別することに成功することができた。すなわち，かれははじめて国家を社会の形態に対応する社会の外皮であると規定し，国家の起原を人間の無意識的な感情の作用に帰することができた。自然の生産物，狩猟，漁撈によって生活する野蛮人(Savage)の社会にあっては，種族の防衛や種族内の秩序の維持のために，必然的に長老が助言者や仲裁者になり，青年が戦士になったりするような，年令，才能および性質の相違にともなう機能配分にもとずく政治組織が成立することを明らかにすることができたのである。

Fergusonは第2に，社会の発展を人間の諸特質の開展として理解し，とくに人間の利己心の発達，したがって経済生活を重要視している。野蛮社会から蒙昧人(barbarian)の社会への移行にともなって，個人的利益への関心，私有観念の発達が重要視されているのはこのためである。

Fergusonは第3に，社会の進歩が無意識的におこなわれることを強調するが，進歩は人間性の一般的特質に根ざしているとみている。Fergusonが歴史過程を通じて人類が直線的に進歩するという見解をとっているのはこのためである。

Fergusonは第4に，人間社会の進歩にとって，環境・気候の諸影響はなんら本来的要素ではなく，進歩の推進力は，支配・服従に基礎をおく社会諸階級および社会間の競争であり，この競争に働く均衡の原理こそが重要であることを明らかにした。第5に，市民社会における技術の発達が齎らす弊害と政治的影響力を指摘することができた。市民社会では人間の年令・自然的才能および財産の分配関係から生まれるな支配・服従の関係とならんで，技術の発展による社会的分業の拡大から生まれる諸階級の慣習の差異が支配・服従関係を生むのである。Fergusonは技術の進歩がその再分割に結びついていること，個々の人間が専門化し，熟練化し，能力を増大することを明確に指摘している。1国の国力が技術の進歩とともに増大し，人口数がふえることの積極面とともに，分業のもたらす不利な結果についても注目する。『機械的技術の多くのものは感情と理性とがまったく抑圧されたばあいに最もよく功を収めるのである。』(p. 277 邦訳356ページ)——Joglandも，市民社会における人間疎外の傾向を明確に指摘したことをFergusonの功積に数えている(S. 166.)。だがこのような帰結に到達することができたのは，Fergusonが人間についての科学という広い基礎のうえにたっていたからである。このような技術の進歩による社会分業の発展は，職業の分化を生み，新らたに身分的階層の形態での職業観があらわれる。『あらゆる

職業は誇りとすべき点をもち，また一定の生活様式を持っている。』(p. 287. 邦訳 369 ページ) このような階級によって一般に市民社会の政治組織が形成されるのである。自由の永続的な存在は，市民社会を形成する諸党派の諸力が均衡を保たれたときのみ可能であると，Ferguson は考える。すなわち，ひとつの党派の優位は不可避的に専制政治に導かれるからである。対立と不和を進歩の推進力と考える Ferguson は市民社会の存立を諸階級の対立のなかに働く均衡の原理のなかにもとめている。この均衡の原則のうえにたつ市民社会の政治形態は混合政体でなければならないと Ferguson は結論する。しかも文学・学問等の人間の社会活動の歴史の研究を通じて，一層根本的には，それはかれの人間性の把握から出ているのである。Ferguson によれば，市民社会に混合政体がふさわしいという究極の根拠は，共和政治では，個人的性格が，君主政治では尊敬すべき能力が見逃されるからである。

最後に，しかしこのような特徴をもつ Ferguson の歴史叙述は，かれの人間についての科学のもつ制約からまぬかれることができなかったことが指摘されなければならない。かれにとって人間の諸特質はあらゆる時代を通じて不変・同一であり，人間社会の歴史はつねに人間の諸特質が逐次開展してゆく過程として，したがって本質的には静態にしか把握されていないことである。「あらゆる形態の種子は人間性のなかに宿っている。それは季節が来れば発芽し，実るのである」(p. 188. 邦訳 239 ページ)。

Jogland は，このようにして，Ferguson の歴史社会学的研究の基礎にある人間についての科学の視点から，かれの著作を統一的に理解すべきことを強調し，人間の全体像が問題としてとりあげられるかぎり，Ferguson の著作がつねに返りみられるべきことを述べて，その研究を結んでいる。

IV

冒頭に掲げた私の問題からみて Jogland の新研究はなにを教えているであろうか。最とも注目に価いすることは，今日からみれば道徳哲学，社会学，歴史学の混沌たる集積と思われる Ferguson の全著作を統一的に理解する視点が，人間についての科学であるということを明らかにしたことである。それによって，たとえば，未開から市民社会への歴史叙述に，芸術・文学などの歴史がふくまれていることの理由が明らかになる。というのは Ferguson の問題対象は，今日の科学体系にそれぞれ位置づけられている部門科学のそれではなく，人間活動の全体の進歩であったからである。そしてそれがかれの人間の一般的特質把握に基礎をおいていることを明らかにした点に Jogland の新研究の最大の意義があるように思われる。しかしこのような Ferguson 研究の新らたな視点を明らかにしながら，Jogland が Ferguson の現代的意味を，市民社会における社会的分業の不可避の結果としての人間疎外の傾向を把握した点に狭くかぎって理解することには賛成できない。むしろ，Ferguson の歴史社会学の貢献は，人間の一般的特質としての進歩の可能性を実現するもの，文化的・物質的進歩を可能ならしめるものが，ほかならぬ人間労働にあるという一般的把握に到達したことではないであろうか。すなわち，過去の蓄積物を保存し，さらに発展させる人間生活固有の存り方としての労働の発見ではないであろうか。そのことは，Ferguson が生物学的歴史観を批判しているつぎ章句から明らかであろう。『かかる推測(—生物学的類推)は，まことに適切なものであって，人類の歴史はこのことを十分証明している。しかし，国民のばあいと個人のばあいとは非常に異なるものがあるということは否定すべからざることである。個人的にみればそれは脆弱な構造と定められた生命の期間とをもっている。……ところが社会においてはその構成員は時代とともに更新されるところから，時代の進むとともに，人類は不断の若さと蓄積された利益とを享受すると思われるから，われわれは類推によって，単なる時代や年月の長さに関連して，衰耗をみいだそうとしてもむだなのである』(p. 316—7. 邦訳 408 ページ)。

第 2 に指摘すべきことは，Ferguson をかれ以後の『スコットランド歴史学派』の発展と関連させてみることの重要性についてである。その後のスコットランド学派の発展は Ferguson の進歩の思想を継承してはいるが，歴史の推進力としての経済的要因に優位をあたえることによって，自由政体への要求を不可避とみる John Millar の歴史研究を生んでいる。Jogland はこの点についてまったくふれていないが，Ferguson と A. Smith との関係を主要研究題目とする H. Huth の研究は Ferguson の市民社会史を A. Smith の『国富論』の序論として把握し，位置づけようとしている。しかし，私には Ferguson はスコットランド学派の歴史的研究の完成者ではなく，むしろかれを起点とする歴史研究の Millar または A. Smith への発展・転回こそが重要であるように思われる。